

表現で始めるといふ改訂を施している。一方、延慶本（長門本も）は四の宮の母、七条院の女房時代の呼び名を記す。このことは見方によれば七条院に対して甚だ失礼な記述ということになりはしないかと考えるのであるが（南都本は「未秋ノ宮ト申時候ケルニ」と臆である）、記述者の後鳥羽院周辺に対する態度が反映しているのである。うか、単なる歴史家としての詳述に過ぎないのであろうか、詳にし得ない。

え討つという方向で、当道系諸本は先述のように義仲と仲直りする手土産として平家追討を企てるという対照的方向で、その間の脈絡付けを計っている。それぞれに工夫の跡が著しいが、しかし、結局史実に帰らず、平家が「會稽ノ恥」を雪ぐという枠の中でのそれに止っているのが特徴であると言えよう（ただし、同様のことは『平家物語』で処々に指摘される）。

未完

（注一）『平家物語南都本の本文批判的研究——読み本系近似の巻を中心に——』（『名古屋大学国語国文学』昭和四十六年十二月発行）

古屋大学国語国文学』昭和四十六年十二月発行）

（注二）『人文』第八号（昭和五十九年六月発行）

（注三）説明の這入った会話文という奇妙な文体である。

（注四）新潮日本古典集成『平家物語』中（昭和五十五年四月発行）の第七十六句「木曾猫間の対面」の〔補説〕

（注五）『瀬尾最期』の方法と性格——覚一本平家物語に即して——（『文学』昭和五

八年十二月発行）

（注六）前稿（一）の表が誤っていたので訂正して置きたい。うまく表示出来ないが、

該当部は

チ兼康、木曾と合戦する事
69（行家を南海道、義仲を山陽道とする）
リ室山合戦の事
f（關・盛・長・屋・覚・平）

g（關・盛・長・屋・覚・平）

70（「八幡加茂」云々の表現なし、表現の違

に近からう。猶お、同表の延慶本の欄のFとIの間には実線が這入り、又、南都本の欄のSとTの間の実線はTとUの間の、Zと42の間の実線は点線（章段の区切りを示すものがないことを表す）の誤りである。

補訂

前稿（一）の「寿永二年八月五日春宮定事」に誤りがあることに気付いたので、次の様に訂正して置きたい。

記事の共通する部分1〜5で気付いた事から述べて行こう。

四の宮が人見知りしなかったので春宮に選ばれたという話は諸本に共通するが、これは『愚管抄』の（前記の通り）と密接な関係があらう（この関係からすれば、「内々御占ノアリケルニモ」の一文を載せる延慶本・源平盛衰記・長門本が本来の姿を残しているのではないか。従って、前稿（一）の「同六日平家一類解官事」の延慶本のイ「惟高惟仁ノ位諍事」の章段で、右の一文に触れて「これなどは、ひよっとすると、この義仲の申し出の処置に関する記事だったのではないかと考えられる」と述べたのは不用意であった。『愚管抄』の姿を残しているものと、皇位が神明三宝の計らいで決まるものだとすることで四の宮の即位を合理化しようとする言葉とは峻別しなければならなかった。猶お、延慶本・源平盛衰記は以仁王の遺児問題を重視し、その申し開きを兼ねさせてこの章段をここに置いたのであらう。）

南都本の編著者は、後白河法皇が三の宮、四の宮に引き続いて会うところを対句的

本（長門本）は紀氏三兄弟を新中納言の家来とする説の強い影響を受けて五陣の大將軍を改めたものと考えられる（前後で矛盾を犯すことになった）。延慶本（長門本）では、二陳までは平家方の策略を窺わせる表現をとっている。一陣は「暫支ヘテ」、二陣も「防様ニテ」右左に落ちて行くのだから、平家方は余裕たっぷりである。しかし、三、四陣が破られるところでは、この余裕は消えている。「コラヘス」「不叶」北南に追い落とされるのだから、勝に乗った行家軍は手がつけれないのだ。あわやの感も漂ったが、紀兄弟を初めとする矢の雨に「面ヲ可向様ナクテ」行家軍がたじろぐ。取り返し始めた行家軍を見て、本陣から関の声が揚がる。それを聞き付けると四陣以下は最初の計画の通りに山峯に走り登って、行家軍の退路を絶つ。紀兄弟の働きだけで追いついたとするのは源平盛衰記だが、延慶本はその話と関係を持ちながら、平家方の作戦勝ちという視点で纏めているのであろう。敵に謀られたと知った行家は、若党に周囲を固めさせて、戦いもせず、ひたすらに駆け抜ける。行家の大將生命はここに断たれたのである。

ところで、延慶本には、先に長門本との異同を挙げたところで述べたように文脈の辿りにくい箇所が残っていた。まず、「源氏四手ノ勢ニ向テ心ヲ一ニシテ支ヘタリ」のところだが、これは行家軍が防戦している表現ではないかと考える。今、源平盛衰記を見ると、行家が若党に周囲を固めさせて駆け抜けたという延慶本と同じ表現があるにも関わらず、それは四陣の囲みを破ったというだけで猶お苦闘が続くことになっている。そこで筆者は、

延慶本の先の表現は、源平盛衰記のように脱出行中の激戦があったことを延慶本編著者は知っていて、にもかかわらず本文中でそれを描く工夫がつかず、要点のみを本文中に残して置いたのではないかと考える。同様に、4のところも、平家勢が「後ニシコ」んだ、つまり、南都本の裏切りの話を知っていて、これを描きようがなく、ただ要点のみを残して置いたものではないかと思う（「シコム」の意味が気になるが）。延慶本には、このような集大成的面、或いは、源平闘争録の略記法で何とか不体裁を切り抜けるようにする工夫があるのではなからうか。

猶お、これは延慶本にも南都本にも言えることであるが、『玉葉』に依れば宝山の合戦は十一月二十九日のことであった。延慶本や南都本（の祖本）はその情報のはいつた日付けだけを記した資料（従って、『玉葉』ではあるまい）を編集して、平家が「會稽ノ恥」（延慶本）を雪いだ話として位置付けたのではあるまいか（とすれば、少なくともこの章段は京都での日次記事と関わりを持つことになる）。それにしても、延慶本の場合も南都本の場合も、討とうとしていた義仲上洛の報に驚いて都落ちした行家がどうして平家と合戦することになったのか、説明がなく、極めて唐突な印象を受ける（南都本の場合は京都脱出と平家追討の関係が結び付いていない）。これは、やはり、その編集の跡、不手際を見せていると受けとるべきであろうか（ということは、延慶本や南都本の鑑賞の仕方は全体の流れに於いてではなく、細部に限定してだったのかもしれない）。これに対して、源平闘争録、源平盛衰記は勢力を回復して来た平家が落ち下って来た行家を迎

明かす意志はないようである。

いよいよ待ち受ける平家方へ行家の率る源氏軍が突つ込んで行く。南都本はこの後、恵比入道達の寝返りが起こるまでの行家軍の破竹の勢いを畳みかけるように描いて行く。源氏の散々な戦い振りに、先ず平家の一陣、二陣が破れる。勝に乗った行家は自ら「大勢ノ中ヲ立様横様クモテ十文字ニ懸破」る。類型的だが花々しい戦い振りと見るべきであろう。それを受けるように南都本は「一陣破ヌレハ殘黨全カラスト云コトナレハ」と継いで、三、四陣が蹴散らされる様を一気に描く。しかし、本陣の平家一門の「身命ヲ輕シテ」の防戦に行家軍の足が止まり、その散々さを持て余し気味のところに寝返りが起こって、あっけなく勝負がついてしまう。「源氏ヲタハカリテ前後ヨリ打圍テ指合セテ後。矢ヲ射ケレハ」という表現からすると、最初からしめし合わせていたものようであるが、それを伏せていて、事態の急転するところを描き出そうというのが南都本のねらいであろう。極めて構成的な技巧と評さねばなるまい。

延慶本の「室山合戦事」は兼光が早馬を立てて行家の離反を報じて来たところから始まり、十一月十一日に行家に下った平家討伐の宣旨までとなっている。この章段の末尾に付いている二つの宣旨は、延慶本独自の増補記事と考えられるが（平家に敗れて、和泉国へ落ち延びたことを描いた後に、平家追討の宣旨が下ったという文脈はどう見ても本来のものととは考え難いので）、それ以前の室山合戦の条は前の章段と同じように長門本に表現までほぼ一致している。長門本と異なる箇所には、

(延) 山^(盛)峯へ馳上テ源氏ノ勢ヲ待處ニ^{けんし} 四陳ヲ破ナムトス[×] 源氏^{是も}四手ノ勢^{矢し}
 二向^{りを}テ心ヲ一ニシテ支^{そへて}ヘタリ^{いけれハ}

(長) 山のみねよりもとの跡にきたり集て是をさへたり
 といった延慶本の文脈の辿りにくい箇所もある(後述)が、それは一例のみで、その外は、

1 平家の一万余騎が室に着いたことを記した後に、行家が三千余騎でそこに行き合つて合戦したという文を入れている。

2 平家の一陣が行家軍を暫く支えたという後に、「弓手ノコクレノ中へ落ニケリ 源氏ソコヲ懸通りテ」という表現があるので、長門本のような不自然な主語の転移はない。

3 脱出行中の行家を「弓ワキニハサミ大刀ヲ肩ニ懸テ通ニケリ」と描いていて、目に見えるようである。

4 「平家ノ勢^{勢いふし}後ニシコミケレハ行家散々ニ射破^{はら}ラレテ」(長門本の表現が細字)のところは延慶本の表現を持て余している風なのが長門本である(但し、文脈として不明。後述)。

のように、延慶本の方が本来の表現をより良く伝えていると見られるものとなっている。

さて、延慶本の行家軍と平家軍の合戦の場面は、行家軍が平家方の術中に陥り、不甲斐なく敗北を喫する、その様を描出して行くことに重点が置かれている。延慶本(長門本)の陣立ては源平盛衰記にほぼ一致している。異なる一点、五陣の大將軍は源平盛衰記の門脇中納言が本来であり、延慶

9	木曾与瀬尾合戦事
	幡磨國室山行家与平家合戦事
10	(法住寺合戦前夜)
11	同十九日法住寺殿合戦事
	廿一日攝録得替事
12	十三日木曾除目執行事

のようになってゐる。この改行による区切りを他本の目録に比べて見ると、1、4、7、8、10、11が屋代本の章段に対応している。対応しない区切りの屋代本における状況は、5、9がそれぞれ二つの章段に分かれ、6が配列を異にする。以上から、南都本の改行による区切りは、屋代本の章段意識を部分的にやや広くしたようなものであり、その次元で配列の入れ替えも行われていると見られる。

さて、内容の面であるが、樋口兼光からの急報を受けて義仲が都へ上つて来る、それを聞いた源行家は道を違えて、反対に都から西国に下る、そこまでは、源平闘諍録を除く諸本は大同小異であり、南都本も「南海道」「山陽道」という言い方を特にしている外は、それらの諸本と目立って異なるところはない。

南都本が十一月三日とする（延慶本・長門本・源平盛衰記と関係があらう）室山合戦は、美作の国の住人恵比入道守信、播磨の国の佐用党、同国の在廳利季、兼知等の寝返りが全てを決めたとして描いている。恵比入道

が攻めて来たので行家軍が敗走したとするものに、外に、源平盛衰記があるが、これは、三方から攻められることになったと、南都本の後矢に比べると構図がやや弱く、しかも、これは、囲みからの脱出行での最後の第一陣との戦いという位置付けであるから、価値もかなり劣ると言わなければならない。南都本はこの寝返りを要にしているところに独自性があるのである。

さて、次に詳しく検討して行くと、南都本はこの部分を、平家を追討しようという行家の積極的な行動で描き始める（当道系本も行家の積極的な姿勢を描くが、「平家ト軍シテ木曾ニ中直リセントヤ思ケム」（屋代本）と彼の意図の影をそこに落とすところで異なる）。そこに、「幡磨美作并近江三ヶ國ノ兵共駈具シテ」と他本に見られない行家軍の具体的な構成が記されているのは、戦いの山場を睨んだ周到な配慮である。南都本のここを作った者はすぐれた構想力の持ち主だったようである。ところが、これに反し、行家軍を待ち受ける平家方の描き方には多少の乱れが感じられる。それは、平家方の大將軍として最初、知盛・通盛・重衡の順に三人が挙げられていたのに、陣立てでは、「平中納言教盛本三位ノ中将以下ノ一萬人々」とあることである。これは、最初の知盛・通盛に問題があり、この原型は推測すれば、延慶本・源平盛衰記の「門脇中納言父子」だった筈である。陣立ては源平闘諍録に近く（人数と四、五陣が異なる）、寛一本・平松家本にも通じるところがある。第五陣とそれ以外との軍勢の不均衡は策略を感じさせるが、南都本は烏合の衆のように描いていて、この策略を読者に

くことにあつたことを物語る。倉光五郎の最期は「其夜倉光夜討ニシテ」という表現であつたりと片付けられている（当道系諸本と対照的）が、これもその眼目のありかと關つているのであろう。それから兼康は「佐々迫」に兵を置き、自分は「カラ河ノ宿」に引き籠る、一方、倉光の下人の話から兼康の仕業と気付いた義仲は裏をかくて、「佐々迫」を落とし、油断していた兼康の本拠地を急襲する。この戦いで注目されることは、「古坂」に三日逗留すると言つた義仲の言葉が兼康の油断を誘い、福龍（輪）寺囃を堀切つていたことが別途を辿らせるといふ駆け引きの妙であり、義仲の巧みな行動の描出である。本拠地を破られた兼康達は「ミトリ山」に這入つて、屋島へと志すが、途中で、周知の壮絶な最期を遂げる。兼康が小太郎のところへ取つて返す点は諸本共通だが、非当道系諸本は「恩愛ノ道不及力事ナレハ」（延慶本）の如く地の文で先に解説を下してしまうのである。従つて、非当道系諸本は「恩愛ノ道」の美しさ、哀しさに焦点を絞っている訳だが、延慶本（長門本）では、小太郎が手を摺り、涙を流して父を迎えることになつて居り、残された小太郎の恨みも晴れる風である。父の愛を見た小太郎は「散々ニ戦テ」（前記）父と共に自害する。更に、この美しい恩愛に包まれた父子の最後を支えた郎等宗俊が凄絶な自殺を遂げて、兼康の奮戦は終結する。延慶本（長門本・源平盛衰記）の兼康の最後には、屋島に行き着けなかつた恨みよりも、親子一つ所で死ねたという充実感のようなものが漂つていないであらうか。最後になつたが、宗俊の自殺の類型性は勿論のこと、特に延慶本の地名の表記には不安定感があつて、

延慶本のこの章段が口承の文字化という作業に深く關つていたのではないかと考えさせられることを指摘して置きたい。

幡磨國室山行家与平家合戦事

南都本のこの章段は、どこから始まってどこで終わっているのかが極めて不明瞭である。筆者は一応、兼康主従の討ち死にが記された直後「木曾ハ瀬尾父子カ頸ヲ取テ」から始まり、室山合戦の勝敗が決まったところで改行される、そこまでと見ることにする。（注ハ）ここで、南都本の改行の様に目を通すと、

1	寿永二年八月五日春宮定事
2	同六日平家一類解官事
3	十七日平家付筑前國事
4	廿四日四宮踐祚事
5	九國二嶋背平家事
6	平家鎮西内没落事
7	頼朝可為征夷將軍御使事
8	平家自九國渡四國事
9	三種神器可返納御使事
10	木曾振舞事
11	同十一月備中國水嶋合戦事

たのは同僚から恩愛の道に背いたことを指摘されるのではないかという気掛かりである。それは小太郎への恩愛に繋っていた。息子の小太郎の方は取って返した父に五逆罪に成ると言って落ちるよう願う。描かれて行くのは互いに相手を労る心である。兼康は子を思う親心（恩愛）の化身と成って物語の世界から去って行くのだ。

延慶本のこの章段は、兼康が「西国へ下ラムスル道指南」として生かされたところから始まる。この章段も、長門本と表現までほぼ一致している。しかし、延慶本は、

1 章段の冒頭に「兼康ヲハ西国へ下ラムスル道指南ニトテ不切ケリ」という一文を持っていること

2 「古坂」「舟坂山」という不整合が見られること

3 「別の渡と云所（より東に藤野寺と云所）にて」の（ ）部がないこと^{アリ}

4 倉満の死について、「悪行つもりて」という言葉がないこと

5 兼康の下に集まった者で「物具シタル者」の数が一桁多いこと

6 倉満の討たれたところで「念佛ヲ申シ」たすること

7 兼康の逃げ込んだ山の名を「ミトリ山」とすること（長門本は「千木山」）

8 兼康の言葉に「いま一度君をも奉見」という表現がないこと

9 宗俊の言葉に「小太郎殿ト一所ニテ清キ御自害候ヘシ」という表現があること

10 小太郎や宗俊の戦い振りについて「敵五人討取テ」、「敵アマタ射トリテ」と記すること

等で長門本と異なっている。右の1の条についてだが、ここはもともと兼康と齋明とが対になっていたのではないかと思われる。もし、そうだとすれば、延慶本の章段の分け方は対を中ばで断ち切るという文学的でない処置ということになる。長門本に問題の一文がないのは区切りを明白にしよという意図からであろうか。又、3の条は、長門本が源平盛衰記に一致しているので、増補なのか省略なのか分からない。一方、7の条は、延慶本が覚一本や平松家本と名称を同じくするところである。

さて、この延慶本（長門本）のものに就いて気付いたことを記して行くことにするが、これらの本では、前記の1の項のところに続けて、兼康を「猿古兵ニテ」と義仲の上手を行く人物であることをほめかしながら、彼が義仲を討つ機会を狙っていることを読者に明かして描いて行く。そして、その後に、「答蘇武書」からの引用のある部分を置いて、同じ内容を繰り返して、強調するのである。この間の兼康の言葉や漢文調の繰り返しの部分は当道系諸本のものに近い。それに次いで、延慶本（長門本）は義仲が平家追討に下向した日を十月四日と明記し、この一文から、兼康の義仲への再挑戦が本格的に描かれて行く。そして、これ以下の話の流れ、表現は、今度は、ほぼ源平盛衰記に一致する。さて、延慶本（長門本・源平盛衰記）では、兼康は「子息小太郎兼道郎等宗俊ヲ相具シテ」先行するのだが、まず手始めに倉光五郎に取返しを付ける。この筋までは、源平闘争録もこれに一致している。倉光五郎を騙し討ちにする条では、兼康の言葉、心内語に無駄が無く、この話の眼目が兼康の計算の緻密さとその運びを描

野に放された虎は勇躍して行家の国司代に襲い掛かる。兼康が国司代を討ったことは当道系諸本にも見られるが、南都本の使い方（脚色）には及ぶまい。国司代を夜討ちにした兼康は早速与力を求める。

源氏ニ取籠ラレテ今ハカウト思ツルカ不思儀ノ命助ツテ是マテ下リタレ サレハ源氏ヲ一矢射テ平家へ参ラハヤト思フソ

南都本の兼康の魅力はこの言葉に凝縮されているようだ。運の強さとしたたかさ。先の「本意」というのも「源氏ヲ一矢射テ平家へ参ラハヤ」のあたりの筈である。やがて七八百人の住人が集まり、嫡子小太郎も「尾嶋」から父の迎えに出て来る。この小太郎が迎えに来るという設定は当道系諸本と共通する。

最後は、視点が義仲に移ったところから後の部分である。まず討ち漏らされた行家の代官が船板で義仲を見付け事情を打ち明ける。このところは当道系諸本に近いが、当の代官が「田夫野人ノスカタヲシテ只一人走り上」っていたとするものは他にない。さて、事情を訴えられた義仲が「ニツクヒヤツカナ」と憤ると、兼平が「ケノ者ト見テ候シ物ヲ」と横から口を入れる、しかし、義仲は「シヤツナラハ何事ノアランソ」と号令をかけて馳せ下る。このあたりの会話も当道系諸本に近いが、当道系諸本は切らなかつたことにこだわる表現をしていたり、兼平がまず向かうとしたりする点で異なる。義仲と兼康が激突する福龍寺畷の説明は覚一本に極めて近い。しかし、南都本は木曾軍が畷に這入ったところの描写から覚一本を放れて独自の表現をする（ただし、兼康が挨拶するところ等は覚一本・平松家本

に近いようである）。このところ、南都本には編集・著述の不手際らしいものがある。それは、この始めの表現「後陣ナル者モ越テカ、ル事モナシ」と終わりの表現「後陣ニツ、キタルハヤリノ若者共道ハセハシ余ニ進セシテ左右ノ深田ニ打入レ／＼渡シケレハクサワキムナカイツクシフト腹ナントニハ過サリケリ」がもともとは一続きの文だったのでないかと感じられることである。従って、これらの二文に挿まれている部分も南都本の編集・著述という匂いが強い（ただし、「信濃國ノ住人小室ノ太郎同三郎」を出しているところは伝承という要素も合わせ考えなければならぬ）。福龍寺畷を破られた兼康軍は板倉の館に退却して防ぎ戦う。ここでも、兼康軍の防戦の程を描く部分は覚一本・平松家本に近いことが認められる。さて、板倉の館を駆け散らされた兼康は徒歩で「上へノ山」に落ちて行く。その途中で、彼は倉満太郎を討って恥を濯ぐのだが、その配置は覚一本・平松家本に近くても、次のような点で異なる。その第一点は南都本には倉満の弟が討たれたという設定がなかったことであり、第二点は覚一本・平松家本のような正面からの一騎討ちではなく、「竹ノ下ヲヨリツト走出」て組み付くことである。砂川博氏が「南都本は北陸合戦で捕縛された屈辱を晴らす兼康の復讐戦として位置づけている」と捉えられたのはまことに的確であった。「岩石ノ山」へ向かったところで小太郎が落伍する。ここでも南都本は又独自の纏め方をしている。兼康は最初自らの本意の捨て難さを述べて小太郎を打ち置いて屋島へ向かうとする。しかし、十町程行き延びた所で足が止まってしまふ。彼の胸を突いて出て来

これを見て、覚悟を決め、討ち死にを遂げる。海辺を守っていた郎等は、教経が船筏を解いて、馬を降ろして真先駆けて攻め寄せると、一たまりもなく逃げ去った。この源氏壊滅の様も、源平闘諍録に大筋で近いが、各場面ではかなり異なる。但し、行弘の最後は、源平闘諍録と同じであり、壮絶な最期を遂げたことになっている。

一方、延慶本の「水嶋津合戦事」の章段には、南都本の「平家ハ水嶋ノ軍ニ勝テコソイト大勢ニハ成ニケレ」という締め括りの一文がなく、義仲がこの事を聞いて安からず思つて下向したという文以下の、むしろ「兼康与木曾合戦スル事」の導入と思われる部分が付いている。

延慶本のこの章段も、表現まで長門本にほぼ一致している。しかし、延慶本は、1行広を平四郎と呼ぶこと 2教経の励ましの言葉の後半が「各ノ心ヲ一ニシテ命ヲオシムヘカラス 軍ハコウコソスルナレ」となっていること 3教経の奮戦の場面がないこと等で長門本と異なる。又、南都本とは、前述のことの外、義清を矢田判官代としか呼ばないこと、行広の最期が、義清が討たれて退却する途中、波風の烈しい中で沈没して死んでしまふとなっていること等で異なっている。

猶お、『玉葉』の閏十月十四日から『吉記』の十一月十五日にかけて、官軍敗北等の風聞が見えるが、水島の戦いをそのうちのどれと決めることは出来ない。

木曾与瀬尾合戦事

南都本のこの章段は、義仲の対応に筆が転じたところ（鉤点がある）から始まる。ここは、章段の途中にも二つの鉤点があるので、鉤点で区切りながら考察を加えて行こう。

まず最初の部分は、義仲が義清・行弘の討たれたことを聞いて西国へ馳せ下るところから、途中播磨国船板で瀬尾兼康が暇をもらつて先に帰るところを許されるところまでである。このところの特徴の一つは、切られた齋明に対して兼康が「奉公仕ルヘキ由」を申して同行を許されたことである。もう一つは、義仲が「何事カハアルヘキ サラハ下セ」と言つて兼康を放すまで、兼康の秘められた「本意」に触れず一氣に叙することである。前者に見られた兼康の姿勢は船板に於て「自今以後君ノ御合戦モ候共マツサキニカケテ討死仕り候ヘシ」と、再び、具体化されながら兼康の口から表明される。この言葉は源平闘諍録、源平盛衰記を除く諸本に見れるが、船板（に相当する地名）での言葉とするものは他にない。

第二の部分は、兼康が「異國ニ詫」、「イカ、シテ今一度旧里ニ付テ本意ヲトケント思」つていたことを紹介するところから、備前の国府を攻め、与力の者を募つて小竹ヶ迫りに楯籠るところまでである。このところに這入つて初めて、兼康の本心が記される。従つて、ここは、前の、表面的に、言動に依つて描かれていた兼康を心理面から捉え直すことになっている。「答蘇武書」からの引用を含む漢文調の文体を使い、兼康に蘇武や李陵の像を重ねて彼の本当の気持ちを描き出していくのはなかなか巧みである。

リケルトカヤ」とあることからすれば、延慶本（長門本）はこの因幡志の話をもとにしているのであろう。次は、猫間中納言の目を通して、義仲の生活振りが生ま／＼しく伝えられていることである。観音講に月に一度しか使わない精進合子——「大ナル合子ノ帯引付テ澁ヌリナル」——でもてなそうとしたこと、「ヲヒタ、シキ様ニ」黒々として毛立たる飯を食べたこと、食後手ずから合子も皿も取重ねたこと等そうである。これによれば猫間中納言も話の提供者に加えねばなるまい。

延慶本の後半部、義仲の初院參を描いたところは、牛童についての説明が重複しているのではないかと思われる。その前の方は、表現までほぼ源平盛衰記に一致している。それに対して、牛童の名前を記したりする後の方は、当道系本的で、平松家本に近い。ただし、「牛ハ聞ユル小アメナリ」など、独自の伝承もそこに見られるので、完全な書承上の作業ではないようである。

延慶本（長門本）の二郎丸は、義仲の叫びを空聞かずしていながら、郎等に牛車を飛ばしたことを咎められると「シハシヤレ／＼ト仰候へハコソ仕テ候へ」としやあしやあと弁ずる等かなりあくどい。第六本の「平氏生虜共入洛事」に依れば、彼はこの時のことで出家したという（ただし、ここでは弥次郎丸と屋代本・平松家本の名前になっている。次郎丸となっているのは寛一本だが、この本によると「木曾が院參の時車やりそんじてきられにける」と言う）。延慶本（長門本）はこの牛童の後日の話にでも依ったのであろうか。

同十一月備中國水嶋合戦事

南都本の、この章段には二点不審なところがある。一点は、行弘を最初弥平次郎と紹介しながら、船軍のところで弥太郎と誤っていることである。もう一点は、搦手の大將軍である行弘を、紹介のところで、大手の大將軍の義清より先に記すことである。南都本の編著者は行弘についての異なる伝承を知って、それを盛り込むことで新しさを出そうとし、このような混乱を来したのかと思える。

南都本の内容を解説を交えながら、次に示してみよう。

平家は屋島の磯に本拠を置きながら、山陽道八箇国を打ち取った。「平家自九國渡四國事」に「長門周防安藝兵カリアツメ備前備中備後三ヶ國ヲ打取ラントス」とあったのは、この平家の勢力回復の萌しだった訳である。猶お、このあたりの表現は当道系本に近い。義仲は憤って、行弘・義清を大將軍として五千余騎の軍勢を差し向ける。山陽道の者もいづらか源氏に付いたので、ますます大勢になって、水島に陣を取る。平家も屋島の磯に陣を取って、海を隔てて相対した。閏十月一日、水島の沖に平家の牒船が現れた。源氏はこれを見て、千余艘の船を海におろした。平家の船五百余艘は、二百余艘を沖に残して、百艘ずつ進んで、源氏を取り囲もうとする。軍勢や船数は非当道系本に一致している。次いで、源平の大將軍が源平闘諍録と同じ表現で記される。平家方は教経が叱咤して、五百余艘が（ちぐはぐだが）船筏を組んで、戦う。やがて、源氏が負け色に成って、義清は主従八人、小舟に乗って退こうとして、舟を沈めて死んでしまう。行弘も、

例に依つて、「對面ノ儀式モ誠ニ無沙汰ナリケリ」と枕を置いてから始める。「先最前ノ詞ニ云フ様根井ヤ猫間殿トハ猶エイハテ猫殿ノマレハサレワイタルニ物ヨソヒテ進セヨ」。^(注三)朝食を出されることになって、猫間中納言は用件をもよく言うことが出来ないでいる。やがて、彼の前に「クホク大キナル田舎合子ノ荒ヌリナルニ毛立タル飯ヲウツ高クモリ拳テ」、食事が用意される。このあたりは非当道系本の叙述にほぼ一致している。すぐ、義仲が食べ始める。猫間中納言は、箸を付けないのもまずかろうと思うが、「合子ハイフセシエリメス様ニ」してその場を切り抜けようと努める。しかし、猫間中納言の苦勞を察しえない義仲は「キコウル猫オロシ、給ヘリ平茸ノ汁ニテ猫殿カキ給ヘ」と言つてはしやぐ。このところは、当道系本に近く、屋代本に覺一本を継いだような叙述である。

後半部、義仲の初院参の可笑しさを描いたところに進めると、南都本は、牛飼と牛の素姓、義仲の危なっかしさを簡単に記した後、牛飼の「目サマシク心ウク」思つていた心情等をやや詳しく描いて、次の牛車を飛ばせる条への雰囲気盛り上げて行く。このあたりの叙述は、非当道系本的だが、独自の運び方を見せている。さて、猛然と駆け出した牛に義仲はなすすべもなく、「例ノナマリ聲ニテヤレ牛コンテイ」ト云」のだが、牛飼はその言葉を猶遣れと心得て、供の者が制するまで牛に駆けさせる。この章段で、編著者が、都人の側に立つて、田舎者の滑稽道中記を仕立てようとしていることは明らかである。笑われているのは、都の習わしから外れた言動であり、言葉の訛である。述べ遅れたが、このあたりは、むしろ

覺一本に近い。最後は、義仲がやたらに「手形」に感心したことと、素通りは出来ないと言つて後から降りてしまうこととである。当道系本に比べると、後述の延慶本もやや饒舌だが、南都本はそれに輪をかけている。延慶本のこの章段も表現まで長門本にほぼ一致している。

延慶本は、この章段を義仲の落ち着きの悪さ、「都ノ守護」なのに「堅固ノ田舎人」であつたことを、言葉によって強調すること始める。言葉によって強調していると言うのは、「吉男」とか「無骨サ」、「頑ナサ」とかいった、南都本にない表現を持つてゐるからである。猶お、義仲の言動が可笑しいのも尤もだということを、延慶本は編著者の言葉として記しているが、長門本は人々が評した言葉としてゐる。

猫間中納言来訪の場面については、水原一氏に、

延慶本・長門本では「猫間」を「猫」と間違えて呼ぶのは義仲ではなく取次ぎに出た根井小弥太である。義仲が食事を勧めるにも「ココニ無塩平茸モアリツ」(延慶本)、「無塩アリ平茸アリ」(屋代本)など魚介にいう無塩と平茸とを混同してはいない。その他異本を読みくらべてみると、義仲に粗野の面はあるにしても、道化役は根井小弥太、そしてこれを嘲笑するのが猫間中納言の供の雑色なのである。

^(注四)という簡明な解説がある。この解説でほぼ尽きてゐるのであるが、二つ程材料の提供者について気付いた事を加えて置きたい。まず、因幡志という雑色が登場している場面には、「猫間中納言」という呼び名に關するところの外に、食べ残しを与えられるところがある。そこに、「提下へ投入タ

で論じた「同六日平家一類解官事」との関係が問題になって来る。『平家物語』では、八月十日に時忠達からの返事があつたことも、十六日に時忠が解官されたことも記していない。従つて、南都本を含めて『平家物語』諸本の時忠は「同六日平家一類解官事」を受けたままで（猶予されたままで）描かれていることにならう。このことは、『平家物語』に於ては「三種神器返納御使事」が時忠の解官以前の状態で設定されていたことを物語るのかもしれない。

延慶本は南都本の「三種神器返納御使事」の前半部に相当するところ（42）しか載せない。そして、それも長門本に表現までほぼ一致している。猶お、延慶本は第六末の「平大納言時忠之事」に、

西國ニオワセシ時院ヨリ帝王都へ入レ奉レ三種ノ神祇返入奉レト仰遣ス
院宣持テ下リタリケル御壺ノ召次花方カ頼ニ浪方ト云火印ヲ指テ
汝ヲスルニハ非ストソ宣ケル サレハ誰ヲ被申ケルソ 院ヲ被申ケル
カ 故女院ノ御ユカリナレハ可被宥カリシカトモ加様ノ事共思召忘レ
サセ給ハネハ法皇ノ御氣色心ヨカラスシテ被流給ケルモ此故トソ聞ヘ
シ

と、花方下向を載せる。しかも、ここも、長門本に表現までほぼ一致しているのである。このように、延慶本は、先帝及び三種神器奪回の動きを三箇所に分けて載せている（もう一箇所はE）のであるが、これらの話は先述のようにそれぞれ出所を異にしていると考えられるので、延慶本のような配置のし方が本来的なのかもしれない。

木曾振舞事

南部本のこの章段の前半部、義仲の猫間中納言接待の様子を描いたところ（55/e）には以下のような独特の叙述が見られる。

まず、この章段は、義仲が平家を追い落としたが、「悪行ハナハタシクシテ花洛ノ狼藉シツマラス」という文で始まる。これは、この章段で語られる二つの逸話と直接関係はなく、むしろ、後出の「同十九日法住寺殿合戦事」へ向けての布石の文と見られる。平家の亡びた理由とされる「悪行」という言葉がここで使われていることにも注目したい。

次に、義仲の人品を、武士としては立派な資質を持ち、容姿も申し分なかったが、立居振舞・言葉つきがどうにもならない田舎人で呆れ返る程可笑しかったと述べる。この章段で語られる二つの逸話の実質的導入部である。猶お、延慶本等の記す、義仲が二十余年間も木曾だけで育つて来たから、それも尤もだという文章は、屋代本同様に記さない。

さて、或る時、猫間中納言が義仲を尋ねて来る。南都本は、来訪の時を「朝トウノ事」と独特の設定をする。食事が出されることになるのを考慮してと思われるが、先に、先にと手を打っている風である。取り次ぎの郎等を根井とする点では非当道系本的だが、その根井が猫間殿と正しく告げているのに、義仲が動物の猫と受け取ってしまう点は当道系本にはほぼ一致する。即ち、南都本は、当道系本的描き方に、非当道系本の要素を加味していることになる。

いよいよ義仲と猫間中納言が顔を合わせる場面である。南都本は、まず、

恨み（縁切り）の便りが届くところは、源平盛衰記的だが、他人との結婚を予想しつつ自分の後世菩提を頼むこと（惟盛の北の方への別れの言葉にほぼ一致するものがあるが）は他本にない。又、延慶本は、「アワレナリシ事也」という編著者の感想を、「ミルタニモ云々」の和歌の後と、入水の後に重ねて記している。

延慶本の「平家九國ヨリ讃岐國へ落給事」の前半部、平家が成良に迎えられる屋島に住み付くまでのところ（37―41）も、表現まで長門本にほぼ一致している。しかし、種直・高直の任国などちょっとした部分で違いがない訳ではない。

三種神器返納御使事

南都本のこの章段は、長門本に内容がほぼ一致している。しかし、長門本は「左兵衛權佐宣長」と誤ったり、「其院宣を平大納言見給て大に瞋て彼院宣投捨」と時忠の態度に詳しい等細部でかなりの異同がある。猶お、南都本は、卷十二に、花形の顔に波形という火印を当てたのは時忠の所行だという一文を持つ。もっとも、その表現は当道系本の方のそれである。

三種神器返納の御使が『玉葉』に出てくるのは七月下旬と十一月中旬の二回である。『平家物語』諸本には「御禊大嘗會モ既近成ムタリ」（南都本）とあるが、それは元暦元年に行われるのだから、虚構ということになるのか。南都本の前半部（42）はこの十一月中旬の場合に通じるところがある。『玉葉』の記事を次に紹介して置こう。

仰云 神鏡劍璽出城在外 吾朝之大事莫過於此 仍試遣御使誘以勅命如何 此事天下有變之時人々議奏 豫雖有其沙汰自然送旬月（中略）如此狀（者彌表）和親之儀可被奉迎彼三神歟 而義仲追討之時官兵敗績 臨此時被遣御使者邊民之愚恐存依士卒之羸弱詔諛之由歟 此條如何 能思量可計奏者 申云 此事舊主蒙塵之刻速可有此儀 而延而至于今 懈緩之條悔而無益 況於有彼漏達之趣乎 被遣御使之條不可及異儀 抑彼報奏之旨密而可有豫議 遠境（之）間御使更歸參之後重有其（儀）者擁怠之處自有變（易）歟 仍智慮所及（然）有議定可被含御使也者（中略） 余云 此儀共可然 抑撰器量可被献其人者

この時、使者の人選にまで話が進んだのかどうか、一切分からない。これに対して、『平家物語』のものは時光が中心になっているので、或いは、時光の周辺から伝えられた話かもしれない。一方、後半部（丙）は、七月下旬の場合に通じるところがある。

余問云 劔璽之沙汰如何 定長曰 主上劔璽共可有還御之由定長書御教書相具主典代景宗可遣平大納言之許 余曰 此事甚羸弱沙汰歟 雖遣御教書於御使者可如召使兩三人可差遣歟 凡此劔璽事以別奇謀尋彼緣邊人可被誘語歟 事雖似有私安穩出來事甚難有之故也

定長が院宣を書くということや名もない者を使いにするという点が一致していると考えるのである。もっとも、『平家物語』のこちらの方は、御坪の召次、花形の周辺から語り出されたものであろう。ともかく、「三種神器返納御使事」が七月下旬の場合を取り込んでいるとすれば、前稿（一）

せない。

最後は、十三夜の月に都を思い出して、忠度達が和歌を詠じたことを記したところである。南都本は、太宰府落ちを八月の末としていたが、屋島で十三夜の月を迎えたという訳である。康定が都に帰って来る十日程前ということになる。これを『玉葉』の閏十月二日の条の「平氏始雖入鎮西國人必依不（始）用逃向長門國之間又不入國中 仍懸四國了」という風聞に比べると、南都本では、屋島入りが一月余りも早められていることになる。延慶本と異なるところを挙げると、公達が必ずしも「一所二指ツトヒテ」いた訳ではなく、行盛が「船ヲ少シ漕ノケテ月ヲ見」ていたとなつていふことや表現が比較的美文に乏しいということ等がある。猶お、ここにある「君スメハ云々」の和歌については、弓削繁氏に、

卷	作 者		諸 本
	平大納言時忠	闕・（四）・延・長・盛	
九（八）	左馬頭行盛	屋・東寺本等	
	左馬頭行盛	覚・盛	
十一（十）	左馬頭行盛	覚・盛	

注、卷欄の（）内は普通の本の巻数。（四）は推定。

諸本によれば、三系統あることになるが、南都本成立段階に既に、卷九・時忠系（読み本系）と卷十一・行盛系（主に語り本系）とがあったものと臆測する。南都本は、その両方を無批判に取り込んでしまつたのではあるまいか。なお、盛衰記が同じ重複を犯している。

という指摘がある。^{（注一）}

延慶本の「左中将清經投身給事」の前までの部分（へゝ34）は「すみなれし云々」の和歌が挿入されているが、長門本に表現までほぼ一致している。

延慶本（長門本）は、まず、前述の十三夜の和歌の会を、南都本と異なり、平家が山鹿城に籠もっていた時のこととして描く。それから、山鹿落ちの場面を、「聊ナクサム心地セラレケル程ニ」取る物も取り敢えず落ちることになったと、太宰府落ちの小型版という風に描いて行く。そして、柳滞在ということになるのだが、そこで、宗盛が、虫の音が弱って来たことに重ねて、「サリトモト云々」の和歌を詠じることになる。ところが、この和歌は、南都本・源平盛衰記・覚一本・平松家本では宇佐詣での時、八幡大菩薩から「世ノ中ノ云々」の託宣歌を与えられて詠んだものとされている。しかも、この和歌は『千載和歌集』に依れば俊成の作つたものであるが、南都本・覚一本・平松家本以外では、宗盛の創作のような表現になっているのである。さて、柳落ちは、山鹿落ちと同様の叙述で、しかも、僅か一週間滞在したに過ぎなかったと、平家が益々追い立てられて来たことを強調しながら描かれる。これは、次の「左中将清經投身給事」の清經の心理を納得させる上で効果的な手法だと見られる。

延慶本の「左中将清經投身給事」の章段は、清經が安住の地を得ないことをはかなんで入水するところ——「都ヲ源氏ニ」以下——が長門本に表現までほぼ一致している。その前にある「最心苦シク被思ケル人」からの

南都本『平家物語』第九、及び、延慶本『平家物語』第四をめぐって

(二)

橋口晋作

平家自九國渡四國事

南都本のこの章段は鈎点によつて五つに分けられているので、それにしたがって見て行くことにする。

まず最初は、平家が伊能の風聞に怯えて、山賀（の城）や柳を落ちて、海上に浮かぶところまでである。南都本は、山賀落ちを章段始めに置くという独自の編集をしている為に、冒頭に「平家ハ山賀ノ城ニ御座シケルヲ」という文を据える。又、素材は、延慶本、源平盛衰記、長門本に揃っていると思われるが、独自の編集の為に、文章の前後が著しい。その中で、忠度の和歌「都ナル云々」を、南都本は柳の御所の名残を惜しんで詠じたものとするが、筆者には、延慶本、源平盛衰記、長門本のように、柳の地が宮中を思い出させたという記事に引き寄せて置いている方が自然に見える（僅に、七ヶ月の逗留であつたということだが）。

次は、清経の北の方が思い死にをして、北の方の和歌と預けていた髪が彼のもとへ返されて来るところまでである。清経の北の方は邦綱の娘、当

時十八歳であつた、彼女は都に残されて、人目を忍んで住んでいたが、清経を恋ひ煩っていた、清経の形見として髪が残されていたが、かえつて思いを増す便りとなるので、返したく思つて「見ル度ニ云々」の和歌を詠じた、そして、間もなく思い死にをしてしまふ、それで、乳母が清経のもとに彼の髪と北の方の和歌を送つてよこす、清経はそれらを見て、言葉もなく、涙を流すのみであつた、という内容である。比翼の鳥の、片身を恋ひ求める纏綿とした情調で統一した世界は他本には見出せない。邦綱の娘というのも、他本は勿論、史料にも見出せないので、邦綱の娘を語る女語りのようなものでも採録したのであろうか。このところで気になるのは、北の方の和歌に「ウサニソ返ス本ノヤシロヘ」とあることである。北の方は清経が宇佐にいると思つてこの歌を詠んだ訳だが、そうだとすると、南都本の柳の地は宇佐郡内のものをさすのかもしれない。因みに、源平盛衰記は、宇佐行幸の後に、清経入水を配している。

三つ目は、清経が世の中を物憂く思つて入水するところである。北の方死去に対応して、南都本は彼女に二度と会えないことを、入水理由の一つとして付け加える。

四つ目は、平家が通資の献じた舟に乗り、四国に渡つて、重能に迎えられ、屋島に内裏を造つて落ち着くまでである。ここでの南都本と延慶本との相違点のうち、通資を橘氏とすることや重能が四方に遠見を置いていたこと等は源平闘諍録に一致する。しかし、内裏造営の勸賞に阿波守に成されたこと、重能が備前・備中・備後を討ち取ろうとしたことは他本に見出